

教員養成課程学生への学習支援実践と課題

楠 崎 久美子*

(2016年11月24日 受理)

Learning Support for Students and Their Problems in School Teachers Training Course

Kumiko NARAZAKI*

This paper is a study to grasp the actual situation and solve problems for students aiming to acquire home economics teacher's license. First, I conducted a questionnaire survey on curriculum and extracurricular support for students who wish to obtain a teacher's license belonging to Hiroshima Jogakuin University. They are satisfied with the current curriculum. However, they are anxious about their own management of classes. In particular, it became clear that to write a lesson composition plan, to teach a practical lesson, and to want to know specific teaching methods. Based on that, I let students practice simulated lessons, practicing cooking and clothing making. Also, I set up opportunities to hear senior student's story. Then, we conducted a questionnaire survey on the effect. As a result, I found that not only acquiring knowledge and skills, but also they can increase their aggressiveness by themselves managing lessons and participating as students. Also, I could confirm the effect that they can extend the observational ability to learn proper behavior by seeing others' actions. It is not that there is no such occasion in regular classes. However, the primary purpose of regular classes is to acquire knowledge and skills. In this research, it was shown that by increasing the experience to learn from each other, it can be expected that the ability to teach students as teachers and to enhance the ability to manage classes can be expected.

Keywords: Learning support 学習支援, Home economics school teachers training course 家庭科教員養成課程, The simulated lesson by students 学生による模擬授業

1. はじめに

現在、「家庭科」に関する注目度は高い状態である。教育現場において家庭科教育を担うのは家庭科教員であり、その養成課程は、大きく分けて高等教育機関である大学の教育学部と家政学部にある。平成25年に報告された日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分会では、中学校と高等学校の家庭科教員の実態調査を行っており、回答者の出身学部の内訳は図1の通りであった。教員養成学部出身者が4割に対し、半数以上が家政学部出身者となっており、家政学を基盤とした学部における家庭科教員養成課程の重要度が見て取れる。しかし、近年の研究では家庭科教員の授業構成力や実習実践

力の低下が見られるという調査結果も出ている^{注1)}。これは教員養成課程の問題ととらえることができる。

さて、広島女学院大学の教員養成課程のうち、中学・高校の教員免許が取得できる課程を中等教職課程と位置付け、家庭科教職課程は生活デザイン・建築学科と管理

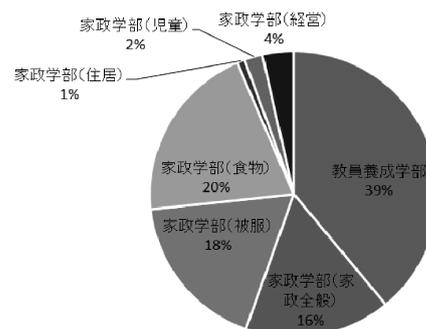


図1 中高家庭科教員出身学部の割合 (N=341)

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科准教授

栄養学科に設置されている。この2つの学科はどちらも家政学士を出していることから、家政学部系統といえる。家庭科教職課程の学生は、教育職に就くための学びだけでなく、教育現場において、次世代に家庭科という科目を通して実践的な「生きる力」を伝える力も身に付けなくてはならない。

しかし、本学の教職課程のカリキュラムを通して本当にそういった力が、特に実習実践力が身に付くカリキュラムなのか、教職課程の学生の実態はどうか、学習支援は充分であるのか、という疑問を持ったのが本研究のきっかけである。

そこで本研究では、本学家庭科教職課程学生の学びの課題を現状から整理し、それを解消するための学習支援を実践し、検討を行ない、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究について

これまで教員養成課程学生に対して、実習実践力を付けることを目的として行なわれた研究としては高橋らの「針と糸を使った制作学習における ICT 活用の提案：教員養成系学部の大学生を対象とした動画教材の効果の検証」^{注2)} や堀江の「教員養成課程における実習指導力を高めるための一考察：非常勤講師の事例をもとに」^{注3)}、本田らの「大学の教員養成課程における調理実習に見られる課題と実施形態の検討」^{注4)}、福田らの「家庭科教員養成課程における調理実習授業の指導力の向上に関する研究：学生の調理技能の実態と課題」^{注5)}などが挙げられる。

本研究もこれらの研究と同様に教員養成課程学生に対する実態解明と課題解決のための支援を行なったものであるが、これまでの研究が教育学部系の学生に行なわれたものが多い中、家政学部系で行なう研究として特筆に値するものである。

3. 方法

調査 A：教職課程学生の実態調査

(1) 調査対象

広島女学院大学の教職課程学生 46名

(2) 調査年月

2014年9月

(3) 内容

秋のオリエンテーション期間に行われる教職課程説明会にて紙媒体のアンケート調査を行なった。質問内容は、教員免許取得に関する項目（教員免許取得希望理由、取得希望免許種類）、過去の家庭科の学びに関する項目（中学・高校の家庭科の種類、印象に残った内容）、広

島女学院大学の教職課程カリキュラムに関する項目（教職科目の難易度、満足度）、教職課程学生に対する学習支援に関する項目の計15問である。

調査 B：学習支援実践と事後アンケート

(1) 調査対象

広島女学院大学の教職課程学生及び課程外学生^{注6)}

(2) 調査年月

2014年10月～2016年2月

(3) 内容

調査 A で明らかになった教職課程学生の課題を解消する為の学習支援の実践として、①3年生による座学と実習の模擬授業実践、②4年生による座学の模擬授業実践見学、③教員による実習授業に応用可能な技術を身に付けるためのワークショップ、④2年生による交流会の運営を行なった。

また、その効果を確認する為、2015年度は事後アンケートを行なった。アンケートでは参加意欲や、学びが深まったかどうか、自身の授業実践への意欲（あるいは今後の学びへの学習意欲）、今後の企画参加意欲、今後希望する企画内容や、参加したことで身に付いた力についての計6問である。

4. 結果及び考察

(1) 調査 A の結果及び考察

今回調査した教職課程学生の学科と学年は以下の通りである（図2）。

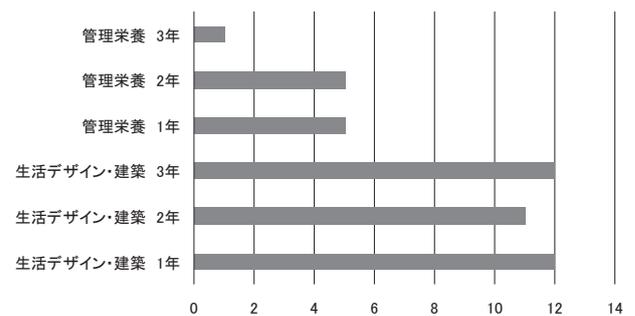


図2 教職課程学生が所属する学科と学年（人）

各学年、管理栄養学科では定員の1割以下、生活デザイン・建築学科では定員の2割近くが教員免許の取得を希望している。管理栄養学科では管理栄養士になることを優先しているため、普段の学びと気持ちに余裕のある学生だけが取得を希望しているのだと考えられる。生活デザイン・建築学科では、免許取得を目指して本学科に入学する学生もあり、人気の高い資格の一つとしてとらえられている。

次に、資格取得希望の理由を尋ねたところ、以下の結

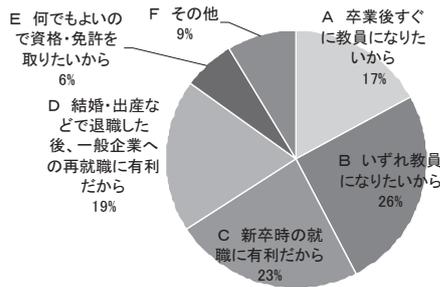


図3 教員免許取得希望理由 (N=46)

果となった(図3)。

卒業後すぐに教員を希望している者は約2割で、それ以外の学生は卒業したらまずは一般就職を希望している実態が明らかになった。紙面の都合で表、グラフは省略するが、学年別に見てみると下の学年ほど新卒で教員を希望する割合が高く、学年が上がると専門的な学びを普段の授業で深めるためか、それを活かした一般就職を希望する傾向が高いことがうかがえる。

次にどの種類の教員免許を取得したいと考えているかである(図4)。

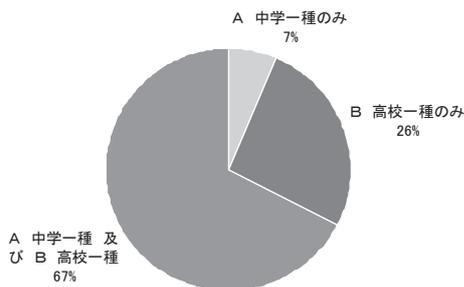


図4 教員免許の取得を希望している種類 (N=46)

7割の学生が中学と高校両方の教員免許を希望し、残りが片方の免許のみを希望している。理由の調査は今回行っていないが、普段の学生の会話から介護等体験実習に行くことや抵抗感を持っているため、高校一種のみの方が多いようである。また、年齢が近い高校生の方が教えやすいという感覚があるようである。

次に中学の家庭科ではどのようなことを学んだか、覚えている分野を選んでもらい、具体的に覚えている内容について自由に記述してもらったところ、以下の結果となった(表1)。

「食生活と自立」に関する学びは4分の3近くの学生の記憶にあり、調理実習に関する自由記述が最も多かった。次に「家族・家庭と子供の成長」、「衣生活・住生活と自立」に関する学びについては約半数の学生が記憶している。自由記述を見ると、幼稚園を訪問したときのことを覚えていたり、エプロンやぬいぐるみを作ったり、

表1 問4の結果 (N=46)

問4 中学家庭科の履修認識(複数可)	人数(割合)
A 家族・家庭と子供の成長	22 (49%)
B 食生活と自立	34 (74%)
C 衣生活・住生活と自立	24 (52%)
D 身近な消費生活と環境	6 (13%)

一人暮らしのときの家具の配置を考えたりするなどの記述が見られた。それに対して、「身近な消費生活と環境」に関する学びについては、ほとんどの学生の記憶に残っていないようで、自由記述にも書かれていなかった。こういった結果はこれまでの研究でも明らかにされており、それらの結果と本学の結果は大きな違いはないものであった。

次に高校の家庭科ではどの科目を学んだか^{注7)}、覚えている科目を選んでもらい、具体的に覚えている内容について自由に記述してもらったところ、以下の結果となった(表2)。

表2 問6の結果 (N=46)

問6 高校家庭科の履修科目(複数可)	人数(割合)
A 家庭基礎	18 (39%)
B 家庭総合	11 (24%)
C 生活デザイン	1 (2%)
D 忘れた	16 (35%)
E その他	1 (2%)

「家庭基礎」と「家庭総合」を学んだ学生がほとんどだが、上級生になると科目名の記憶がおぼろげになり、忘れていた学生も多かった。家政科や総合科出身の学生は家庭総合を学んでいるようであり、実習の伴う被服の検定や調理の検定、浴衣制作やフードデザインなど詳細な授業内容を覚えているようであった。なお、受けた科目が違っていても、調理実習や被服製作に関わる記述が基本的には多かったが、保育分野と衣生活分野の複合的な学びに関する記述(例「毛糸と棒針を使用し、幼稚園にプレゼントするあや取りを制作したこと」)や、食分野の学びに関して、その後の食生活に影響を受けた記述(例「一日の糖分を角砂糖であらわした。お菓子をあまり食べなくなった。」)など、記憶に新しいからか、中学に比べて記述の量が増え、内容も具体的であった。なお、既習

科目の割合については、家政学士を出している学科であるため、こういった割合になったが、教育学部では、普通科の割合が多く、家庭基礎しか学んでいない学生がほとんどではないかと考えられ、今後の比較調査の課題としたい。

次に本学の教職課程科目の難易度に対する学生の認識の結果である（図5）。

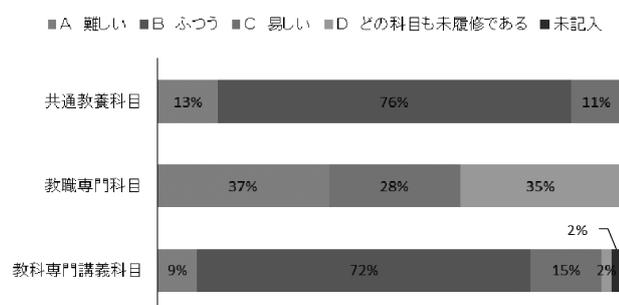


図5 教職課程科目の難易度 (N=46)

共通教養科目は、スポーツや日本国憲法、英語など教職課程学生以外の学生も学ぶ一般教養の科目である。これについては、ふつう、と答える学生が多く、難しい、易しいと考える学生も1割強ほどいた。教職専門科目は、いわゆる教職論や教育原理、生徒指導論など他教科も含めた教職課程学生が共通に学ぶ科目である。これについてはすでに履修をした2・3年生が難しい、あるいは易しいと答え、この調査を行なった9月から履修が始まる1年生は未履修であるとの回答であった。履修をした学生としては、教職専門科目を苦手だと感じる学生が多いと言える。教科専門講義科目は、衣生活論や住生活論や食品学や保育学、家庭経営学といった「家庭科」に関わる科目である。こちらは学生にとっては好きな分野あるいは得意な分野であるからか、普通と答える学生が圧倒的であった。なお、学年と難易度についてクロス集計を行なったところ、 χ^2 乗検定において学年による教職専門科目と教科専門講義科目の難易度意識には関連はなかったが、共通基礎科目には有意水準 $p < 0.05$ で関連性が認められた。つまり、教職課程のカリキュラムが学年ごとに履修すべき科目をバランスよく配置している、ということがうかがえる。

次に教科専門実技科目についての難易度についてである。本研究では実習授業の実践力について注目したため、別の質問項目とした。本学のカリキュラムでは必修科目として、衣生活分野の実技は和裁基礎が洋裁基礎、食生活分野の実技としては調理基礎、住生活分野の実技としては製図を含む住居基礎、保育分野では幼稚園に実際におもむき、子どもと触れ合う実習を含む保育学の科

目を配置している。ただし、高齢者分野や消費生活分野についての実技科目はない。難易度についての学生の認識は以下の結果となった（図6）。

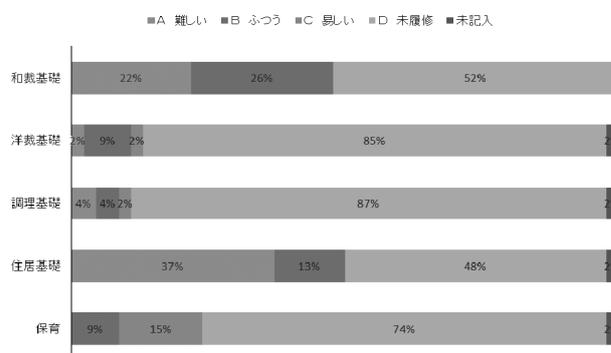


図6 教科専門実技科目の難易度 (N=46)

履修した学生だけの傾向を見てみると、和裁基礎と住居基礎を難しいと感じる学生が多く、他の科目については実態を明らかにできたとはいいがたい結果となった。しかし、生活デザイン・建築学科の教職課程学生は被服に興味・関心がある学生が多く、建築士課程を要する本学科の住居基礎の授業は建築士課程学生と共通しているため専門的で、難しさを感じている様子が普通の学生の様子からうかがえる。また和裁基礎も、高校が家政科出身である教職課程学生にとっては2度目となる為、あまり難しさを感じていないようであるが、実際には普通科や総合科出身の学生の方が教職課程学生には多く、裁縫に対する苦手意識に拍車をかける授業であると述べる学生も見受けられた。

次に教職課程カリキュラム全体の満足度について聞いたところ、以下の結果となった（図7）。

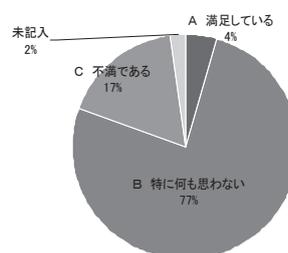


図7 教職課程カリキュラムの満足度 (N=46)

80%近くの学生が、特に何も思わない、あるいは満足していると答えている。しかし、17%の学生は不満を抱いており、その理由を尋ねたところ、「司書教諭の科目と、教職の科目が同じ時間にあるのでうまく履修できるようにしてほしい。」「(管理)栄養(士)の科目と被って取れない教科が多い。隙間時間で履修できるようにしてほしいです。」といった、他の資格との兼ね合い

を要望するものと、「建築のプレゼンテーションの授業とか、設計の実習も取れたらいいのにと思いました.」,「時間割的に履修できていないものが多く、これから先少し不安があります.」,「被服系の授業を実習に行く前にしたい(裁縫など)」といった家庭科教育に関する知識や技術をより多くしっかりと獲得したいという要望に大きく分けることができた。カリキュラムの特性上、履修すべき科目が多く、時間割を変更することは難しいが、知識や技術の獲得に関しては課外でフォローすることは可能であると考えられる。

なお、本学の教職課程では教職課程学生を課外で支援する講座や企画を数年前から運営し、学生に参加を促している。これまで行なったことは、以下の通りであり、これらについて特に今後も継続を希望する支援内容を尋ねたところ、以下の通りであった(図8)。

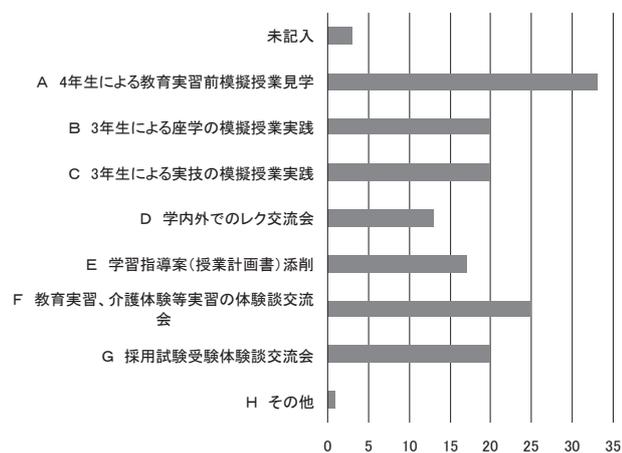


図8 継続を希望する課外支援内容(複数可)(人)

4年生の教育実習前の正課授業の中で行なわれる模擬授業を生徒役として見学するもの、教育実習・介護等体験実習の体験談を下級生に話してもらった交流会、3年生による模擬授業の実践が継続希望として挙げられた。中学、高校時代に教育実習生と触れ合ったことはどの学生もあると考えられるが、自身が実習生としていくという自覚が芽生えてから、改めて具体的な学びの内容や体験談に触れたいという意識が見受けられる。

更に、今後開催を希望する課外支援内容について、選択肢を挙げて尋ねた。以下が結果である(図9)。

学生が開催を希望している課外支援内容としては、学習指導案(授業計画書)書き方講座が最も多い結果となった。本学の教職課程において、家庭科教育法の授業内で書き方の指導はあり、また、教職課程委員による個別の学習指導案添削指導もこれまで行なっていたが、どの学科、学年からもこの項目について希望がでてい

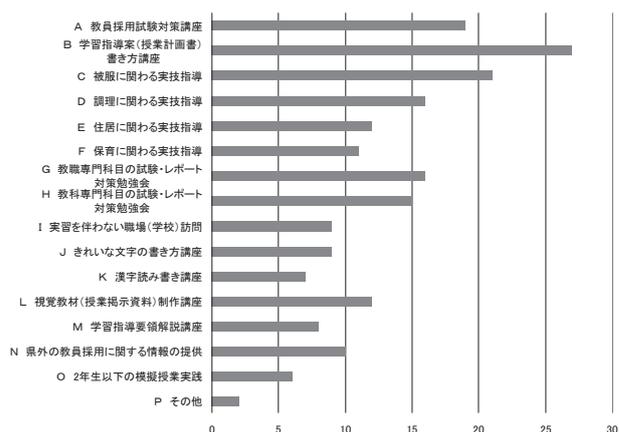


図9 開催を希望する課外支援内容(複数可)(人)

いうことは、更に詳細な書き方が知りたいという気持ちの表れだと考えられる。次に、被服に関わる実技指導、教員採用試験対策講座、教職専門科目の試験・レポート対策勉強会に15名以上の希望が集まっている。これらは管理栄養学科の学生あるいは下級学年に多く見られた要望で、調理に関わる実技指導は生活デザイン・建築学科の学生が主に要望を出していたことから、各学科であまりやらない内容を課外で支援してほしいという希望が見て取れる。

調査Aの結果より、以下のことが考察される。まず、本学の教職課程の学生の実態として、教員になる意欲は高くないが、取得意欲は低くない。次に、教職課程科目に対し、全体的に苦手意識は低いといえる。ただし、調査時期が9月だったため、教科専門実技科目については実態を完全に明らかにすることができなかったため、これに関する調査は今後の課題である。そして、指導案の書き方についての不安が最も多いが、これについては、圧倒的な経験不足が根底にあると考えられる。また、自分の学科や学年で学ぶ内容からより遠い内容の学習支援を希望していることが明らかになった。

この教職課程学生の実態を踏まえ、これまで課外で行なってきた学習支援の内容を充実させ、また、積極的に参加を呼びかけ、学習支援の実践をし、その効果についての検討を行なった。それが調査Bである。

(2) 調査Bの結果及び考察

① 3年生による模擬授業の実践

2014年度に初めて3年生による模擬授業の実践を行なった。中学、あるいは高校の教育実習の研究授業を模して、50分間実際に授業を行なってもらうものである。生徒役には教職課程の学生1~4年生に声をかけ、都合のつく限りで集まってもらった。2014年度の実践状況は表の通りである(表3)。

表3 2014年度3年生による模擬授業実施日程

番号	月 日	時 間	担当学生	生徒役学生
1	10月27日	18時15分～19時30分	谷	2
2	10月29日	16時45分～18時	和田	0
3	11月10日	18時15分～19時30分	石井	12
4	12月8日	18時15分～19時30分	平林	3
5	12月15日	18時15分～19時30分	遠山	8
6	12月22日	18時15分～19時30分	川野	2
7	1月8日	18時15分～19時30分	池田	5
8	1月9日	18時15分～19時30分	菊池	4
9	1月15日	18時15分～19時30分	南部	0
10	1月19日	18時15分～19時30分	新家	2
11	1月23日	18時15分～19時30分	三村	4
12	1月26日	18時15分～19時30分	黒川	3
13	2月6日	13時～14時30分	宇野	0
14	2月9日	18時15分～19時30分	森木	3

表4 2015年度3年生による模擬授業実施日程

番号	月 日	時 間	担当学生	生徒役学生
1	5月22日	18時～20時	森木	9
2	10月9日	18時～19時	石津	11
3	10月16日	18時～19時	佐々木	12
4	10月23日	18時～19時	藤山	14
5	11月13日	18時～19時	木下み	9
6	11月27日	18時～19時	谷本	7
7	12月4日	18時～19時	三木	11
8	12月11日	18時～19時	坂本	9
9	1月20日	15時～18時	石津	9
10	1月22日	18時～19時	木下歩	6
11	2月5日	13時～14時	桑名, 細美	7

教職課程学生にとっては正課外で、しかも指導案を書いたり、掲示資料の準備をしたりするなど準備期間も必要のため、3年次で取り組んでいる際はかなり拒否感や面倒だと受け取れる態度が見受けられた。筆者が教職課程学生は全員がやる、と説得し取り組ませた結果、教職課程3年生全員が模擬授業を実践した。この学生たちが4年生になった際、教育実習前の正課での模擬授業実践や、実際に教育実習に行った後、「3年生の時に50分通して模擬授業をしていてよかった」と実習体験交流会や教職課程勉強会で述べていたため、授業実践の経験値を増やすという目的は達成されたと考えられる。

また、2年目の2015年度には、以下の日程で実施した(表4)。

教育実習へ行く前の4年生が調理実習の模擬授業を行ったほか、昨年度に模擬授業をして役に立った、という経験談を聞いた下級生が2015年度は3年生の模擬授業に生徒役として積極的に参加をしたのが2015年度の特徴である。また、教職課程外の学生も生徒役として参加してくれたため、模擬授業担当学生にとっては顔見知りばかりの模擬授業にならず、適度な緊張感もあり、かなり有意義な支援となったと考えられる。

そして、2015年度に行なった模擬授業のうち、調理実習の模擬授業に参加した学生に事後アンケートを行なった。

まず、参加の熱意については以下の通りである(図10)。

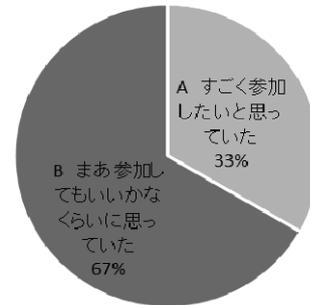


図10 参加の熱意 (N=6)

正課外の時間に行なうこと、調理実習は50分間を2回続けて行なうため、その点が負担となり、参加意欲は低いかと考えていたが、意欲が高いという結果が出た。これは一人暮らしの学生もおり、夕食を作る手間が省けるという、学生自身の生活形態が関係していることが考えられる。

次に模擬授業に参加することで、家庭科食生活分野についての学びが深まったかどうかについて聞いた。以下が結果である。

参加者は何かしらの学びの深まりを感じていることが

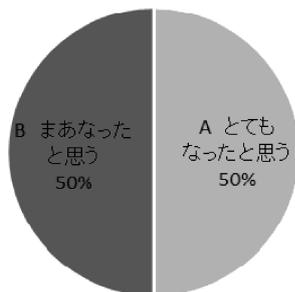


図11 家庭科食生活分野の学びの深まり (N=6)

分かる。具体的な内容には触れていないが、模擬授業者が設定した「本時の目標」そのものの理解の深まりはもちろん、他者と共に作業をし、調理道具に触れ、食材を扱うことによって、目標以上の学びを得ていることは十分に考えられることである。

次に学生が教員役をすることで、どのようなメリットがあるかを質問し、選択肢の中から複数選択してもらった。以下が結果である（図12）。

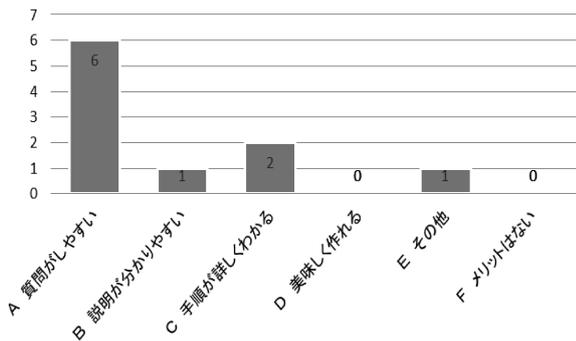


図12 学生による模擬授業のメリット（複数回答）（人）

教職課程の学生も、課程外学生も、学生が教員役をする授業のメリットとして、「質問がしやすい」と全員が答えている。教員役の学生に親しみやすさを感じ、「家庭科」に興味・関心を持っている様子が見えられた。その他の答えとしては「年齢も近いので親しみがあり、授業にあまり身構えることなく楽しく作ることができる」というもので、通常受けている講義や実習は成績評価に直結するため力を入れているが、学生が教員役をすることで作業を楽しみながら行なうことができるという実態が明らかになった。

次に今後の参加の熱意を聞いたところ、以下の結果となった（図13）。

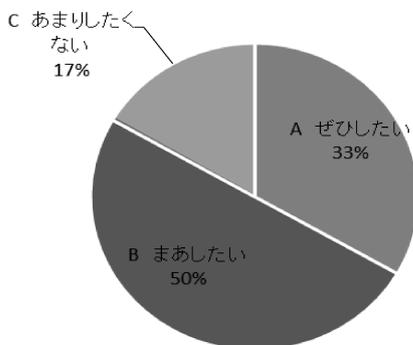


図13 今後の参加の意欲（N=6）

やはり時間外であるという負担が見受けられ、教職課程外の学生が「あまりしたくない」と答えている。しかし、他の学生はおおむね前向きな回答をしており、今後

の参加に期待ができる。

今後の参加意欲の質問で「ぜひしたい」、「まあしたい」を選んだ学生に、今後参加するとしたら何を作りたいのか、選択肢から選んでもらったところ、以下の結果となった（図14）。

今後作ってみたい内容（複数回答）

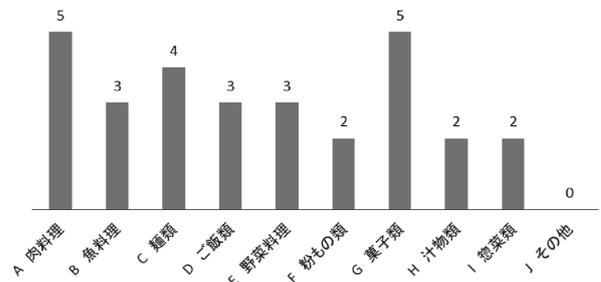


図14 今後作ってみたい内容（複数回答）（人）

肉料理と菓子類は全員が作ってみたいと考えている。また、麺類、魚料理、ご飯類、野菜料理など主食や主菜に関心が集まっている。これは、家庭科の食生活の学びを深める為というより、自身の食べたいものや普段の食生活を豊かにするためのレパートリーを増やしたいという意識の表れではないかと考えられる。調理実習はただ単に食べる為でなく、栄養素や食べ合わせの知識、食物の科学的な反応を利用した調理や切り方などの技術を身に付けるため行なうものであるが、そこまでは模擬授業を担当した学生も参加した学生に伝えるには至っていない様子が模擬授業を監督した際確認できている。

最後に、模擬授業の生徒役を通して、身に付いた力について選択肢から選んでもらった。以下が結果である（図15）。

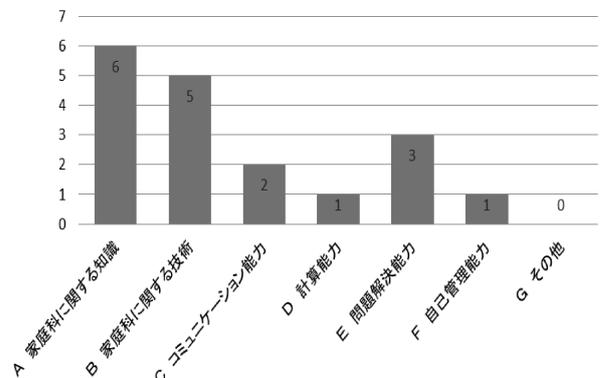


図15 模擬授業参加を通して身に付いた力（複数回答）（人）

こちらが提示した力すべてに票が入り、単なる家庭科の授業というだけでなく、その中からさらに得る力があることが見て取れる。特に、問題解決能力に票が入っ

ているが、これは、作り方通り制作するために、何が必要であるか、どういう風に班員と達成していくか、ということがこの能力を伸ばすのに関わっていたと考えられる。そして、教職課程学生だけでなく、教職課程外の学生もこの学習支援に参加することで、幅広い能力を得る機会になるという示唆を得ることができた。

② 4年生による模擬授業実践の見学

本学では各年度の5月に正課で一人20分～30分程度模擬授業を行ない、教員や受講生から改善点などを指摘してもらって授業が行なわれている。この授業に下級学年の学生を生徒役として参加させ、実践力を高めることを目的とする学習支援である。授業する4年生にとって、6月の教育実習に向けて最も意識の高まった時期であり、その雰囲気の下級学年の教職課程学生にも伝わり、双方にとって緊張感の走る内容となっている。特に、学科外の教育学を専門に教えている教員が成績評価を担当するため、さらに準備や当日の態度に気合が必要なものである。実施状況は以下の通りである(表5)。

2014年度は多くの参加者がいたが、2015年度はかなり少ない状況であった。これは、下級学年の時間割が大いに関係をしており、参加したくても2015年度はできな

表5 4年生による模擬授業実践見学状況

	2014年度	2015年度
教職課程学生(4年)	10名	13名
見学授業日数(延べ)	6日	6日
生徒役参加者(延べ)	44名	10名

い、という状況であった。その分、3年生の模擬授業に参加する学生が増えているということも言えるであろう。3年生の模擬授業についても、4年生の模擬授業についても、他人の振る舞いを見て、自らのやるべきことに気付くという姿勢を育てるためにも、こういった機会はあるだけ多くとる必要があると考えられる。

③ 教員による学習支援(ワークショップ)

教員によるワークショップの実践状況は以下の通りである(表6, 7)。実態調査で明らかになった要望を踏まえて、被服実習、調理実習に関するワークショップを開催した。そして、その後参加者にメールで質問項目を送り、1週間以内に返送してもらうという事後アンケート調査を行なった。

被服実習では、初級、中級などレベル別に作成する作品を参加者募集段階で提示し、参加学生は希望したものを時間内で制作するという流れで行なった(図16)。



図16 被服実習ワークショップの様子

表6 2014年度ワークショップ実施日程

番号	月日	時間	内容	参加学生数
1	12月6日	10時～12時	被服実習応用(ミシン)	11
2	2月12日	10時～13時	被服実習応用(ミシン・手縫い)	6
3	2月19日	10時～13時	被服実習応用(手縫い)	6

表7 2015年度ワークショップ実施日程

番号	月日	時間	内容	参加学生数
1	12月5日	16時30分～20時	被服実習応用(ミシン, 手縫い)	5
2	12月12日	9時30分～12時30分	被服実習応用(ミシン)	2
3	2月19日	11時～12時	調理実習応用	4
4	2月24日	11時～12時	調理実習応用	5
5	2月26日	14時40分～16時	被服実習応用(ミシン, 手縫い)	1
6	3月3日	13時～16時	被服実習応用(ミシン)	2

手縫いやミシンの基礎的な能力の向上、苦手意識の軽減を目的としているため、正課授業のようなかたくなしい雰囲気避け、ワークショップのような気軽な環境を心掛けた。被服実習応用については、管理栄養学科の学生の要望が強く、2014年度は被服実習応用のみを学習支援として行なった。2015年も同様に、同学科の参加が多く、複数回参加する学生もいた。なお、3年生の模擬授業と同様に教員が行なう学習支援にも教職課程外の学生にも参加してもらったものがある。これは、学生が手順等で困った時にどのように教員が指導しているかを教職課程学生に見てもらい、指導の方法を体感してもらうという目的であった。また、作業に困った学生が出た時に、同席している教職課程学生にどうやって解決するかを聞き、自らの技術向上だけでなく、教える立場としての実践力を育てるという狙いもあった。一方通行の知識や技術の習得型の学習支援ではなく、アクティブラーニング的アプローチでの学習支援を行なうことでその効果を期待したものである。

2015年度に行なった事後アンケート結果は、以下の通りである。まず、参加の意欲については、以下の通りであった(図17)。

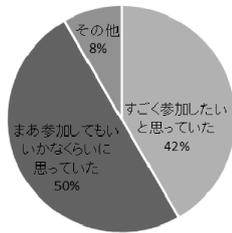


図17 参加意欲 (N=12)

かなり、あるいはある程度熱意があると答えた学生がほとんどであった。その他と答えたのは1人で、具体的な記述はなく、教職課程外の学生で、教職課程外の友人同士で参加申し込みをした学生のうちの1人であった。

次に、今回のワークショップを通して、被服実習の練習になったかどうかという質問を行なった。直接的な効果を自覚しているかを問うたものである。結果は以下のようなになった(図18)。

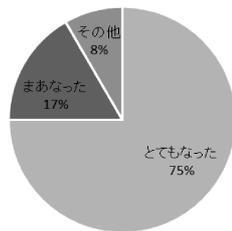


図18 被服実習の練習効果 (N=12)

4人に3人がその効果を実感している結果となった。その他と答えた学生は参加の熱意でも同様の回答をしていた学生で、具体的な記述はなかった。この学生が作ったものは基礎縫いの応用である刺繍のブローチであったことから被服=衣服と捉え、イメージがわかかなかったのだと考えられる。

次に、制作のための資材や用具などをこちらで準備したことが、どれくらい制作においてやる気を高める効果があったかを尋ねたところ、以下の結果となった(図19)。

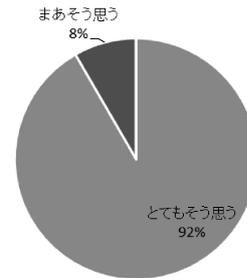


図19 学習支援によるやる気の向上 (N=12)

ほとんどの回答者が、準備されたものを使うことでかなりやる気が向上したと答えている。現在は手芸用品店でも作り方や材料がすべてまとめてある手芸キットのようなものがあり、そういったものが受け入れられている現状に影響を受けているのだと考えられる。また、高校までの家庭科でも被服実習はそういった教材を使用して被服制作をした経験がある学生が実態調査でも見受けられた。よって、段階的な制作の支援を行なうことにより、本人たちのやる気を引き出すことが可能であると言える。自由に制作したいというよりは、難しくないのならちょっとやってみたい、やり方を知りたいという心情を作成中の学生の様子からもうかがうことができた。

次に今後の参加意欲について尋ねた。結果は以下の通りである(図20)。

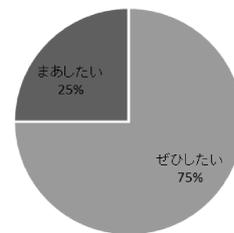


図20 今後の参加意欲 (N=12)

すべての学生が意欲的な回答をしており、技術の習得を望んでいる傾向がみられる。同時に、正課内の授業だけでは物足りないと感じているとも考えられる。

この結果については、以下のことが言える。生活デザイン・建築学科では教職課程科目としては「ファッション

ン・デザイン実習Ⅰ（浴衣）・Ⅱ（ワンピース等）」が1科目選択必修で、選択科目に「被服構成学（含実習）」で原型製作を学び、「ファッション・デザイン実習Ⅲ」がジャケットスーツまで制作することが可能である。また、学科の特性上、文化祭ファッションショーで披露する衣装を制作する「ファッションプレゼンテーション実習」や織り、編み、染め、刺繍作品を制作する「テキスタイルデザイン実習」などが卒業要件科目として配置しており、基礎から応用まで幅広く学ぶことができる。しかし、管理栄養学科の被服に関わる実習は「ファッション・デザイン実習Ⅰ・Ⅱ」が生活デザイン・建築学科と共通の1科目選択必修である。もちろん、管理栄養学科は教職課程科目において食物や調理に関する科目は多く、それぞれの専門性に特化したカリキュラム編成であるため、このような結果になったと言える。さらに、教職課程では教職専門科目を卒業要件外で履修しなくてはならないため、学生の履修の負担は大きい。また、教育学部のカリキュラムでも実習に関わる授業は多くなく^{注7)}、教員として実習授業の実践力を付けるには十分とは言えない。この点について、本研究では課外という形で支援を行なったが、やはりメリットは多く、それが正課であればより学生の学びに貢献できると言える。それは、今後制作したいもののバリエーションの多さからも言えることであろう（図21）。

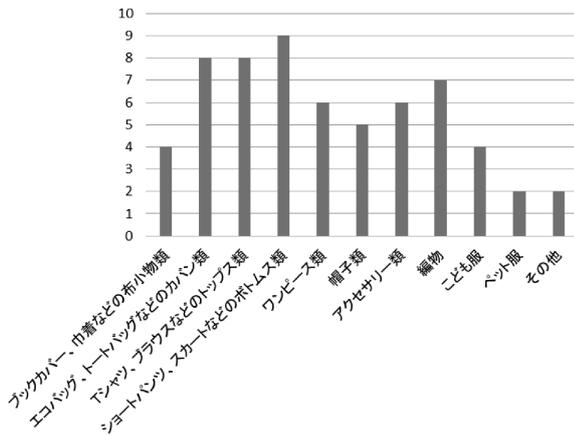


図21 今後制作したいもの（複数回答）（人）

こちらが選択肢として提示したものは全て選ばれており、自身が使用するであろう布小物と被服系作品だけでなく、こども服やペット服など家庭生活の質の向上を目的とした作品にも興味を示していることが特筆すべき点である。物があふれ、安価で便利なものが購入できる現代社会において、それらを制作してみたい、という意欲があることは、学びの姿勢としてすばらしく、また、将来に活かそうという意識をうかがえる。なお、その他の

答えとしては、「プラ板を使ったアクセサリ、羊毛フェルトを使ったマスコット、ペットボトルホルダー」と1名の学生が答えており、モノ作りに関心のある様子が見受けられた。

最後にワークショップを通して身に付いた力について尋ねた。家庭科の知識的・技術的な学びではなく、実習形式で支援を行なうことによって多角的な能力を伸ばすことができるのではないか、という仮説のもと、実施したものである。結果は以下の通りである（図22）。

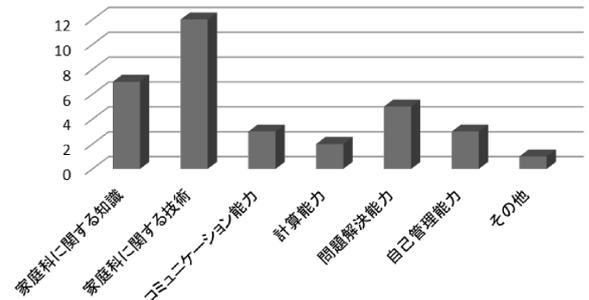


図22 身に付いた力（複数回答）（人）

今回のワークショップを通して身に付いた力については、技術的な力や問題解決能力、自己管理能力がついたと答える学生が多く、また、その他の答えに「集中力」があることから、被服実習のワークショップは個人作業であるため、本人の内面的な能力の向上を自覚している様子がうかがえた。

調理実習のワークショップは中学あるいは高校の教科書に掲載されている献立や教員採用二次試験内容からメニューを教員が決め、3名から4名の班に分けて実践した（図23）。



図23 調理実習ワークショップの様子

器具の扱いや、調理の基礎的な能力の向上、苦手意識の軽減を目指すもので、被服実習と同様の狙いから、教職課程外の学生にも参加してもらった。そして終了後参

加者全員に事後アンケートに答えてもらった。

まず、参加意欲について尋ねた。以下が結果である(図24)。

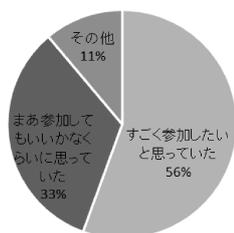


図24 参加意欲 (N=9)

参加の意欲に関しては、被服実習より高い。作ったものを食べることができるという点に魅力を感じていることが作業中の様子から見受けられた。その他の答えとしては、「日程が合えば知識等も身につけたいので少なくとも1回は必ず参加したいと思っていた」という内容で、こちらも意欲は高いと言える。

次に調理実習の練習としての効果があるかのついて尋ねたところ、全員が「かなりそう思う」と回答した。作業中にどのような手順を担当するかは人それぞれであるが、何らかの知識や技術を獲得したと自覚していると言える。

次に今後、自身が教員として調理実習を実践するにあたってのやる気はどれくらい高まったか、と尋ねたところ、以下の結果となった(図25)。

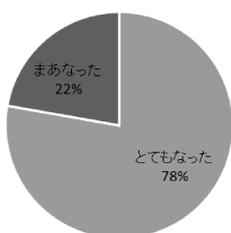


図25 学習支援によるやる気の向上 (N=9)

基本的には前向きな回答であった。これまでの調理実習は自身が作ることを重視して受けてきたであろうが、今回のワークショップでは自身が調理しながら、教員として指示を与える場合にはどうしたらいいか、食材はどのように準備をしておけば生徒の調理時間を増やすことができるか、実習中の火やガス、刃物の取り扱いを生徒にどのように注意するかなど、実習を指導する立場でのコメントを実習中に細かく指導した。このことから、単に作るだけでなく、作業全体、教室全体に視野が広がり、授業者として自信もついたのでと考えられる。

次に今後の参加意欲について尋ねた。結果は以下の通りである(図26)。

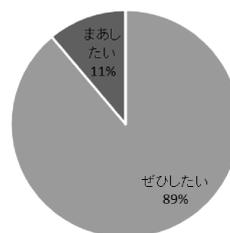


図26 今後の参加意欲 (N=9)

こちらも被服実習に比べるとより参加意欲が高いことがわかる。実態調査でも中学や高校の覚えている家庭科の授業は圧倒的に調理実習に関係することであり、今回のワークショップもそういった背景から今後も参加したいと答えた学生が多いのだと考えられる。

今後作ってみたいメニューについては、以下の通りである(図27)。

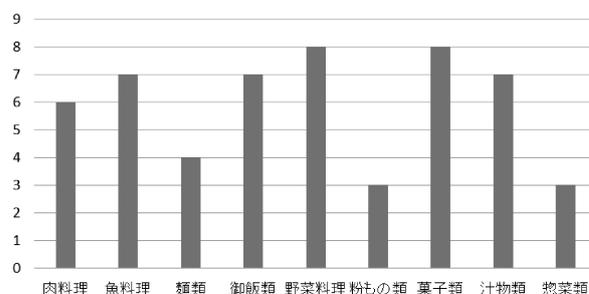


図27 今後制作したいメニュー (複数回答) (人)

野菜料理と菓子類が多く、主食、主菜もリクエストがある。しかし、粉もの類と惣菜類に関してはやや少ない。栄養バランスの良い献立を知るにはどれも重要なものであるが、このアンケート調査結果からは自分が食べたいものという観点で選んでいると考えられる。特に、惣菜類は副菜にあたり、献立を作る際に栄養バランスを補完するのに重要な役割を持っているため、関心を持ってもらいたいメニューである。教職課程の正課授業でも、教員によって決められたメニューを毎回作っているため、そういった献立の作り方も含めた実習の学習支援をすることによって、そういった観点を獲得できるのではないかと考える。

最後にワークショップを通して身に付いた力について尋ねた。結果は以下の通りである(図28)。

家庭科に関する知識・技術に関しては全員が身に付いたと答えている。家庭科といえば調理というイメージがここからもうかがえる。また、被服実習と比較すると、調理実習はグループワークのため、コミュニケーション能力が身に付いたという学生が多くいるのが特徴的であった。

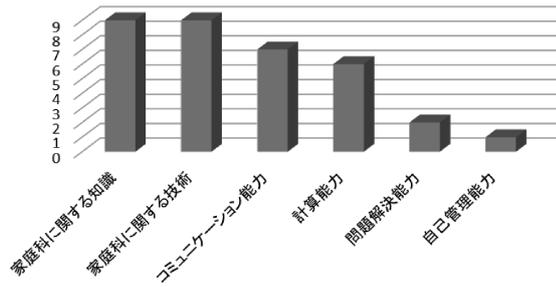


図28 身に付いた力 (複数回答) (人)

また、計量や焼き時間、煮る時間などの計算があるため、計算能力が身に付いたと答えた学生も半数以上いた。実際は被服実習においても、採寸や布地の用量を計算するなど、必要な場面はあるが、鍋や包丁などの調理器具に比べより見る機会が少ない針やハサミ、ミシンなど用具の扱いに意識を傾けているため、こういう結果になったのだと考えられる。

高齢者については2015年度に副教材活用力について言及するために企画をした。管理栄養学科の学生の参加が多く、教職課程の学生のみ7名で行なった (図29)。

ワークショップでは、家庭科における高齢者の取り扱い



図29 高齢者疑似体験キットを使用している様子

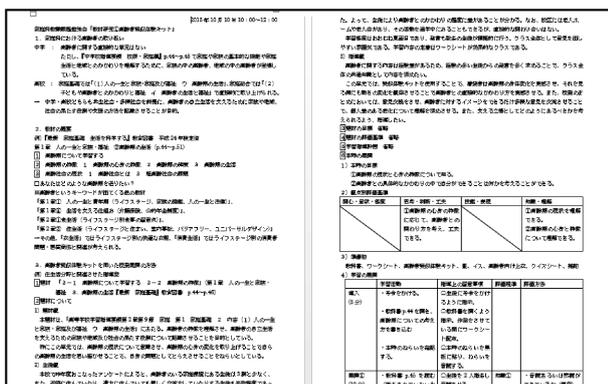


図30 ワークショップで使用した学習指導案を含む配布資料

いと教材の概要及び学習指導案 (図30) とワークシートを作成し、副教材として高齢者疑似体験キット^{注9)}を使用した。生徒としてではなく、教員としてどのようにこの教材を活用するか、どのように進めていくかを具体的に言語化することで、授業構成力の向上を狙った。

事後アンケートはこれまでのものと異なり、より教員視点で副教材をどう見るか、ということを中心として尋ねた。まず、「高齢者」や「福祉」にあたる単元の理解について聞いたところ、以下の通りであった。

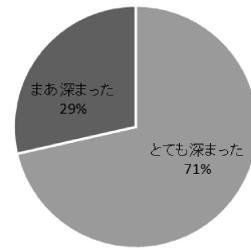


図31 単元の理解 (N=7)

回答者全員が深まったと答えている。教材研究は現在のカリキュラムでは正課授業ですべての分野を網羅するわけではないため、高齢者に特化したこのワークショップで理解が深まったことについては狙い通りである。

次に他の単元との関連に目を向け、その点について尋ねたところ、以下の結果となった (図32)。

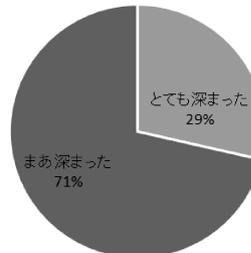


図32 他単元との関連理解 (N=9)

また、どの単元との関連が深まったのかを尋ねたところ、以下の結果となった。

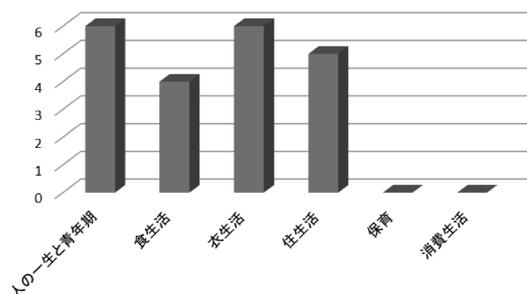


図33 関連する他単元の種類 (複数回答) (人)

今回取り上げた高齢者福祉は「人の一生と青年期」という単元で扱う内容であるが、同一単元内の別の内容との関連が深まったと答えた学生が多かった。また、手指を使いにくくしたり、視野を狭くしたりする体験を通して、生活の中で高齢者は不便に感じる可能性があるということに気付き、衣生活や住生活、食生活の中でよりよく暮らすために関連付けて考える必要があるという自覚が芽生えたようである。保育に関しては、回答者は0であり、筆者も直接的に関わりは薄いと考えている。しかし、同じ回答者が0である消費生活に関しては、消費問題（老人を狙った詐欺など）や必要なものを購入するのにどのような方法があるかなどの単元が関わりのある内容である。その点については、ワークショップの指導の中でさらに強調すべき点であったと言える。

次に副教材を使ったことによる単元の理解について尋ねた。以下が結果である（図34）。

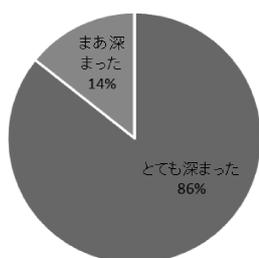


図34 副教材による単元理解 (N=7)

副教材を用いることにより、単元理解は深まりを増したと感じている学生がほとんどであった。授業の中で副教材を使うことで生徒の理解が深まるという視点は当然のことであるが、だからこそ、教員養成課程においても教材研究では、教科書の中身の理解を机上でのみするのではなく、副教材も含めた体験的な研究を行なうことにより単元の理解が深まり、指導力を高める効果が期待できることがうかがえる。

次に今回のワークショップを通して、副教材を使用した授業構成力、生徒を評価する力、副教材そのものを活用する力がついたかについて尋ねた。以下が結果である（図35）。

今回のワークショップを通して、どの力についてもある程度はついたと感じているようである。学習指導案を配布したことが大きいと考えられ、最後の質問で全体の感想を自由記述してもらったところ、「児童生徒だけでなく、教員も経験したことの無い事柄について教える際に、体験するとイメージし易く考えやすと感じた。高齢者に親切に思いやりを持って接するという精神面だけでなく、実生活の中で行動できるよう学ぶ必要があると

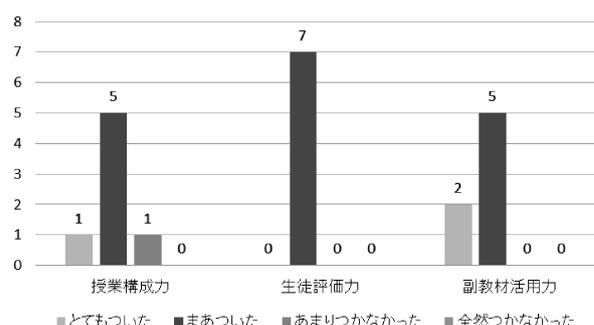


図35 身に付いた力

実感した。」という記述があり、指導に関する視点を獲得できた様子がうかがえる。

④ 2年生による交流会企画・運営

2013年度から教職課程の2年生の有志に依頼をし、教職課程学生が学年や学科を越えて交流できるよう、交流会を企画、運営してもらった。2014年度、2015年度も行ない、以下のような実施状況であった（表8）。

表8 2年生による交流会企画・運営日程

実施年月日	内容	企画者	参加者
2014年12月5日	・デコレーションホットケーキ制作 ・家庭科クイズ大会	2名	11名
2015年11月30日	・お好み焼き制作 ・家庭科クイズ大会	5名	7名

2年生はこの時期、教職に関わる科目は座学が多く、実習がカリキュラム上少ないため、教員としての学びを主体的に進めている、あるいは何かしらの力が付いていると実感しにくい時期である。しかし、この段階で授業の指導案を作成するには知識や経験が足りないのも事実である。よって、交流会の企画・運営、つまり、学年の異なる学生とどのようにして交流してもらうか、また、何か食品を作ることを通して交流してもらうために、レシピや手順を考えることで授業構成力及び生徒指導力の向上を期待できると考えたため、この学習支援を実践した。また、参加した学生にとっては、調理実習に近い企画であり、また、班に分かれて家庭科に関するクイズに挑戦する中で、課程学生との交流はもちろん、家庭科に関する知識を得ることもできることもねらいとした。

2015年度は企画した学生、参加した学生にそれぞれに事後アンケートを行なった。企画した学生には企画の熱意、事前・当日準備による調理実習実践力の向上効果、交流会中の調理実習実践力の向上効果、今後の企画意欲、企画・運営したい内容、企画・運営を通して身に付

いた力、感想（自由記述）を質問した。紙面の都合上、すべての解答を掲載することは省くが、企画者全員から回答が得られ、おおむね全ての項目に対してプラスの評価、コメントが見受けられ、自由記述では「自分たちで献立、調理の流れ、司会進行を考えたことで先生になることの大変さを感じることができましたし、1から何かをやるということの達成感を得ることができました。参加者の皆さんが楽しそうに交流しているのを見ると企画して良かったと思えましたし、企画した自分たちも楽しかったのでは是非また企画して下さい。（後略）」と、こちらの狙いをうまく受け取ってくれたことが伺える感想があり、学年に応じた実習実践力の学習支援の1つとして、今回の試みは有用であると考えられる。

なお、参加した学生にも事後アンケートを行なったが、こちらは回答率が半分程度であったため、分析は割愛する。

調査Bの結果から以下のことが考察される。3・4年生による模擬授業実践とその見学は教職課程学生として学びの自覚や教育実習への意識が、授業をした学生も、授業を受けた学生も高まる傾向が見られた。高まるからこそ、現状のままではだめだと不安になる学生もいれば、先輩がこんなことをしたので、自分はこういう授業をしたいと意欲が高まる学生もおり、学生それぞれの意識をより良い方に持って行くためにはどうすればいいかという課題が明らかになった。

教員主導のワークショップは、家庭科についての理解を深め、被服実習にしても、調理実習にしても今後の制作意欲を高める効果があることが分かった。教員に教わることで成功体験となり、それを重ねることで自信がついたためだと考えられるが、教育者の視点を獲得させるためには、正課授業の中でも単に作らせるだけではいけないということが言える。その点については、高齢者に関するワークショップは学習指導案を用いたことにより、教員としての自覚を促すことができたと考えられる。また、模擬授業実践や交流会、ワークショップでの教職課程外の学生や他学年の教職課程の学生との交流は、教職課程学生としての自意識、自覚を高める効果があり、意欲が向上したり、正課授業でも率先してリーダーシップを取ったりする傾向が見られ、この学習支援が有用であることがうかがえる。

5. まとめと今後の展望

本研究では、本学の教職課程学生の実態を踏まえた課外支援を実践することによって、実習実践力を向上させるためには、カリキュラムあるいは科目の中での指導法

に見直しが必要であることが明らかとなった。つまり、実態調査から教職課程学生は授業内容に不満はないと考えているが、同時に授業を受けたことで十分な授業実践力がついているとは言えないと同時に思っていることも明らかになった。しかし、本研究で行なった学習支援によって、経験を増やせば意欲や自信が向上していることが分かった。よって、正課でも十分な実践体験を組み込む必要があると思われる。

なお、学科や学年の違う学生、教職課程外の学生との交流を通して、教育者、指導者としての視点を獲得するための方法の検討は十分ではなかったため、今後の課題としたい。さらに、教育学系家庭科教員養成課程の学生との交流を図ることで、相互の学習経験を実践力の向上に活用する可能性についても検討したいと考えている。そのことにより充実した教員養成課程を構築し、実践力のある教員を養成する一助になると考えられる。

最後に、本研究は2014年度広島女学院大学学術研究助成を受け、共同研究「共生社会に資する「生きる力」を育むための学習支援に関する研究」（採択期間2014～2015年度、代表者小林文香）によって行なったものであり、2016年10月2日に行なわれた第63回日本家政学会中国・四国支部大会（愛媛大学）にて発表した内容に加筆・修正したものである。

注

- 1) 例えば、黒光貴峰らの「鹿児島県における家庭科教育の実施状況：中学校家庭科教員の実態」（『鹿児島大学教育学部研究紀要、教育科学編』、鹿児島大学、2011）では、鹿児島県の中学校家庭科担当教員にアンケートを行ない、臨時免許や免許外で教えている教員が56.1%もおり、「保育」や「住居」、「家庭生活」の分野の指導に関して得意でないと感じている教員が半数以上いることを明らかにしている。同様の研究は他にもあるが、現在はそれを踏まえて、教員養成課程に対する研究が目立っている。
- 2) 高橋美登梨他、『日本家庭科教育学会誌』59(3)、2016、pp. 135-143
- 3) 堀江さおり、『宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術』87、2016、pp. 33-43
- 4) 本田藍他、『日本家庭科教育学会誌』58(4)、2016、pp. 249-259
- 5) 福田明子、『学校教育実践学研究』21、2015、pp. 125-132
- 6) 調査人数については、それぞれの学習支援によって異なるため、それぞれの結果において提示する。
- 7) 高校では科目によって学習内容が異なっており、今回の調査では大まかに傾向をつかむため、科目のみ尋ねた。
- 8) 例えば、広島大学教育学部人間生活系コースの被服実習に関わる科目は「アパレル設計実習Ⅰ・Ⅱ」であり、プ

ラウスと浴衣の制作のみである。

9) 教育図書より販売されている「高齢者疑似体験教材始動用フルパッケージ」を使用した。

図・表出典一覧

図1 日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会による平成25年の調査結果より著者作成

図2～15, 17～22, 24～28, 31～35 アンケート調査をもとに著者作成

図16 2015年12月4日 広島女学院大学にて著者撮影

図23 2016年2月19日 広島女学院大学にて著者撮影

図29 2015年10月10日 広島女学院大学にて著者撮影

図30 著者が作成した配布資料の一部

表1～8 調査をもとに著者作成